

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：62608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2011

課題番号：22720095

研究課題名（和文） 平安朝文学にあらわれる装束・調度品描写研究のための近世有職故実書研究

研究課題名（英文） Research of the writings about the Heian period described at the Edo period for research of the literature of the Heian period

研究代表者

森田 直美 (MORITA NAOMI)

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：10552945

研究成果の概要(和文):江戸時代後期に成立した、平安朝文学を素材とした有職学文献の内容、及び、各著作の影響関係(継承・変容)を明らかにすべく、齋藤彦麿、松岡行義、及び周辺人物の著作調査・研究を行い、得られた成果を基に口頭発表、論文発表を行った。更に、調査した近世期の有職文献を、平安朝文学研究に役立てる試みを、口頭発表、論文発表によって実践した。調査・研究を通して、特に明らかになったのは、まず彦麿や行義が研究を行う際、図説という方法を積極的に取ったことである。また、彼らが研究資料として、中世・近世期に成立した考証書よりも、中古期に記された文献(西宮記や北山抄といった有職書や、栄花物語や大鏡といった歴史物語、随筆・枕草子など)により重点を置いていることにも注目すべきである。更に、図説という方法に取り組んだ研究スタイルは、近世後期の有職学・文学研究全体の気運に同調したものであること、その気運が、もはや図説なくして平安朝物語を理解しにくくなっていった時代の要請によって招かれたことを明らかにした。更に、彼らが有職研究を、平安文学の読解に還元しようという意欲を有しており、その意識が前時代の故実家・文学研究家の姿勢に比して、非常に特徴的であることなどを指摘した。

研究成果の概要(英文): I investigated the books about the literatures of the Heian period described at the Edo period. The books which I investigated are writings of Hikomaro Saito and Yukiyooshi Matsuoka. They were the ancient-practices scholars in the late Edo period.

They used illustrations abundantly, when explaining the literatures of the Heian period. It is the feature of their writings.

Illustrations were very helpful to people in the late Edo period to understand classical literatures. The writings of Hikomaro and Yukiyooshi were described in view of such a historical background.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世期の有職学、近世期の平安文学研究

1. 研究開始当初の背景

現在、平安朝文学研究の場は全体的に、色彩や装束・調度品といった事項に、やや疎い状況にあると言える。作中に示される装束や調度品などの描写は、単に場面を彩るだけではなく、人物造型の一方法であったり、暗喩される事象を含むなど、作品読解のための要点になる場合が少なくない。にもかかわらず、これらに対する知見が乏しいことが要因となり、肝心なところで文意を過不足なく読み解くことがかなわない場合があることは看過できない。更に憂慮すべきは、誤りと思われる説が、再考されることなく、定説としてまかり通ってしまっている場合すらあるということである。

上記のような問題が起こる要因は様々に考えられるが、そのひとつとして確実に挙げられるのは、中世・近世期に成立した有職故実書が、文学研究の場で有効に活用されていないことである。特に江戸時代中期から末期には、『源氏物語』や『伊勢物語』をはじめ、平安朝文学を材とした装束・調度品に関する有職故実書が多数著されているにもかかわらず、平安文学研究においてこれらが考察の材とされた例は、非常に少ない。

こうした状況を少しずつでも打開してゆくためにまず必要なのは、近世期に成立した、平安朝文学を材とする有職書を調査・研究し、有用と思われるものを学界に呈示することだと考えた。また同時に、呈した考証書が、実際平安朝文学研究へどう活用できるのかを示すことも、これらの文献の有用性を示す上で重要だと思われる。

2. 研究の目的

1. に記した背景から、本課題の目的として設定したのは、以下の3点である。

- (1) 近世末期の文学者であり有職故実家である齋藤彦麿・松岡行義、及びその周辺人物による著作の調査・研究。
- (2) (1) の結果、有用と判断した著作の研究・翻刻。更にその成果を学術雑誌等に発表する。
- (3) (1) の結果、有用と判断した著作を、平安朝文学作品の読解に活用し、成果を口頭発表・論文によって公開する（有職文献を作品理解に活かす実践方法の呈示）。

3. 研究の方法

2. の目的を遂行するために、おおむね以下の手順で調査・研究・報告（発表）を行った。

- (1) 日本古典籍目録等のデータベースや、全国の主要図書館・文庫の目録調査を用い、本研究において調査対象とする人物・時代の書物を選定する。
- (2) (1) によって選定した書物の内、特に重要と思われるものから、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムや紙焼き、インターネット上で閲覧できるデジタルアーカイブに提供されている写真資料等を通して、それがないものや、実見が必要と思われるものに関しては実地調査によって、調査を行う。
- (3) (2) の調査を経て、近世期の、平安朝

文学を材とした有職文献の内容、及び各著作の影響関係等に関する研究成果を口頭発表・論文等で公開する。

- (4) (2) の調査を通し、特に有用と思われる著作に関しては、翻刻を発表。
- (5) (3)、(4) と同時に、近世後期成立の有職故実書を活用し、平安文学作品の考察を实践した成果を、口頭発表・論文によって公開する。

4. 研究成果

斎藤彦麿・松岡行義を中心に、前時代・同時代の影響関係があると思われる人物をも含め、著作調査・翻刻・研究を行った。更に、調査・研究を行った著作を活用し、平安朝文学作品の読解を实践した。具体的な成果は、以下の8点である。

- (1) 彦麿・行義は、平安朝を中心とした古典文学を解説する際、図画を多く登用することに強いこだわりをもっていた。こうした姿勢は、近世後期における、平安朝文学研究の一傾向ではないかと思われる。よって、同じく近世後期成立と考えられる『源氏装束図式文化考』（国文学研究資料館蔵）や、『源氏図式抄』（大阪府立中之島図書館蔵）等を調査。上記二点の著作調査・検討を通し、江戸後期には、平安朝文学にあらわれる装束や調度品を、単に言葉のみで解説するだけでなく、「図説」というスタイルで理解しようという気運が高まっていたことを論証した。それは、もはや絵図なくして、平安朝の装束や調度品、風習について理解できなくなっていた、近世後期の人々の要請によって招かれた気運であった。そして、彦麿や行義の活動が、時代の要請とそれに応えた故実家の姿勢を象徴するものであることを明らかに

した（拙稿「近世中・後期における平安朝物語の図説化—装束関連の書を中心に—」）。

- (2) (1) の拙稿において、中世から近世中期ごろまでの故実家たちには「平安朝文学を有職故実研究の材としよう」という姿勢が看取されるのに対し、行義には「有職故実学の成果を平安朝文学の読解に還元しよう」という意識が見えることを示した。この目的意識の反転は、何を目的として有職学と平安朝文学を研究するのかという点において、非常に特徴的であることを指摘した。
- (3) (1) の拙稿において、彦麿・行義に対する、伊勢流故実学の影響について指摘した。また、行義と彦麿の著作には明らかな影響関係が看取できるが、二人は、伊勢流故実学を学ぶ中で、交流していたのではないかという可能性を呈した。
- (4) 彦麿の著作、『勢語図抄』の伝本調査を通し、掲載された参考図の彩色において、鉄心斎文庫蔵本だけが、他の伝本に比して独自性を示していることを明らかにした。そして、鉄心斎文庫の参考図彩色に独自性が生じた理由が、図の彩色者による注釈本文理解の反映にあることを追究した。また同時に、彦麿の『伊勢物語』解釈の、従来研究に対する特色を明らかにした（拙稿「鉄心斎文庫蔵『勢語図抄』の彩色」）。
- (5) 彦麿の『勢語図説抄』に示された「若紫のすり衣」に関する説、及び、参考図として示された絵図を手掛かりのひとつとし、「若紫のすり衣」の実態を解明すべく調査・検討を行った。また、この考察に際し、実際に紫根を用いた擦り染め実験のフィールドワークを行ったが、その行程の参考として、伊勢貞丈（斎藤

彦麿の有職学の師)の著作『貞丈雑記』を用いた。この調査・研究・実験を受けて得た成果を脱稿した論文は、拙著『平安朝文学における色彩表現の研究』に収載している(拙稿「若紫のすり衣」考—主として染料・染色技法から考える『伊勢物語』形成への作用—)。

- (6) 平安朝文学に散見し、以降の有職故実書において、しばしばその実相が議論されてきた「濃き色」について、中・近世のさまざまな有職故実書による検討した。そして、これが現在定説と受け止められている「紅、もしくは紫の濃色」ではなく、「蘇芳の濃色」であろうことを論証した。この成果は、2010年度中古文学会春季大会の席上で発表(「濃き色」試論—衣配りにおける明石君の御料「濃きが艶やかなる」を起点として—)。更に脱稿し、⑤の拙著に論文を収載した(拙稿「濃き色」試論—衣配りにおける明石君への御料「濃きが艶やかなる」を起点として—)。

- (7) 行義の『源氏物語』研究の初段階がうかがえる、『源語図抄』(書陵部本)の翻刻を行い、発表した(拙稿「宮内庁書陵部蔵『源語図抄』翻刻」)。

- (8) 行義の『源氏物語』研究の様相がうかがえる『源御問答』(国文学研究資料館初雁文庫蔵本)の翻刻を行った(現在、掲載媒体を模索中)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①森田直美、鉄心斎文庫蔵『勢語図抄』の彩

色、日本女子大学大学院文学研究科紀要、第18号、pp19-25、2012年、査読無

- ②森田直美、赤澤真理、伊永陽子、宮内庁書陵部蔵『源語図抄』翻刻、瞿麦、第26号、pp35-50、2011年、査読無

- ③森田直美、近世中・後期における平安朝物語の図説化—装束関連の書を中心に—、『国文学研究資料館 文学研究篇紀要、第37号、pp121-141、2011年、査読無

[学会発表] (計1件)

森田直美、「濃き色」試論—衣配りにおける明石君の御料「濃きが艶やかなる」を起点として—、中古文学会春季大会、2010年6月、於・慶応大学)

[図書] (計1件)

森田直美、平安朝文学における色彩表現の研究、風間書房、363頁、2011年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田直美 (MORITA NAOMI)

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：10552945

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし